文は信なり

日本クリスチャン・ペンクラブ（略称JCP）発行・責任者　池田勇人
事務局　〒131-0043　東京都墨田区立花4-6-13　三浦喜代子方
T　　EL＆FAX　03-3616-8621　郵便振替00170-0-161838
ホームページアドレス・http://jcp.daa.jp

石の板からパソコン画面まで
神の愛の発信方法を考える

理事　三浦喜代子

本離れ、活字離れと、あちらこちらで嘆きの声が聞かれるようになって、もう、十年、二十年経つでしょうか。文章を書く者にとっては大きな悲観材料です。

せっかく、いのちを削るようにして書いたものを、読んでくれる人がないとしたら、どうしたらいいのでしょう。

しかしもう、書くのはやめた、時間と労力の浪費だ、などと、あっさりと筆を捨てられるでしょうか。

あかしの文章に志す私たちは、自分の好みや趣味だけで書いているのではないとは自明のことです。神さまは私たちＪＣＰの一人ひとりに、「わたしの愛をあかしせよ」と熱心にささやき、貴い使命を与えてくださったのです。ときどき原点と初心を確かめてみることは、前進のための推進力になるのではないでしょうか。

イエス・キリストの十字架の贖いによって、私のような者が救われたのだ、この愛を書かずにはいられない。

あの大きな挫折の中で、私に寄り添ってともに涙を流し、嘆息を聞いてくださったイエス様の愛を、証しせずにはいられない。

あんなに大きな災難や深刻な病気のとき、励ましと慰めと癒しを与えてくださった主を、伝えずにはいられないと、あの時のことも、この時のことも、昨日のことも、今日のことも、もし、発信しないなら、主の愛に対して、申し訳ない…。

そんなおもいに駆り立てられるのではないでしょうか。

偉大な文書伝道者三浦綾子氏は、著書の中で次のように公言しています。

「わたしは、このキリストの救いを、十三年の闘病において知らされた。そして、これこそが、人間を真に生かす道、真に幸いにする道、すなわち福音であることを知った。従って私は、直接であれ間接であれ、キリストの福音を伝えようとして書いているのである。たとえ文学的にどうであれ、この姿勢を変えるわけには行かないのだ」

これこそあかしの文章の真髄です。

たとえ本を読む人が少なくなっても、なんとかして、幾人かにでも、あかしの文章を届けずにはいかないのだと、綾子氏の後に続く私たちは言い添えたい思いです。

聖書には神の愛（御心）を伝える方法がいくつも示されています。

『十戒』は、最初のあかし文章だと信じますが、いったいどこに書かれたのでしょうか。

石の板です。神さまは御自分の指を筆として、なんと石の板の上にご自身の愛の発露を刻みつけました。

その後のあの膨大な律法は、羊皮紙に書かれたのでしょうか。死海文書のように今でも残っているものもあります。

宣教の始め、イエス様は、ナザレの会堂で、手渡された巻物を朗読なさいましたが、それも羊皮紙のものでした。

エジプトで作られたパピルスはペーパーの原型でしょうが、紙による文書伝達の方法は長く、今に至るまで続いています。これからもこの世のある限り、なくなることはないでしょう。

ところでここ十年ほどの間に、驚異的に用いられているのが、ご存じネットによる伝達です。いわゆるパソコンの画面上で読まれるものです。新聞のニュースはもちろん、企業や個人のホームページ、有名人だけでなく、一個人でも簡単に発信できるブログのたぐいです。また文学書など、かつては印刷物として読んでいたものがほとんどがネットで読めるのです。今ではペーパーで読む人より、ネットで読む人の方がはるかに多いそうです。

歴史を支配し時代を導いておられるのが神さまだとしたら、ＩＴも神さまの許容の範疇にあるわけですから、個人の嗜好で蔑視軽視するわけにはいきません。むしろ、文書伝道の手段が増えたと考えて積極的に関わりを持っていくべきだと思います。パソコンの使える人は大いに利用して、福音を発信したらいいのではないでしょうか。

ペンクラブもホームページを設けて、集会の案内から会員の作品まで多くの文書を掲載しています。会員８００万人と言われるブログには、かなりまとまった文章が書けますし、最近急上昇のミクシイにはすでに４００万人の人が加わって、何らかの文書を発信しあっています。私もごく最近参加しました。

目にする人が多いのはすばらしいことです。だれがどこで心を動かされ、キリストを発見するきっかけになるかもしれません。測り知ることのできない神秘に胸ときめかせて、何であれ、自分にできる方法でキリストの愛を発信していこうではありませんか。

『宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるのでしょう』

ローマ一〇・１５

１６号目次

＊巻頭言・三浦喜代子／１～２
＊関西ブロックから
木村隆一兄召天　追悼　久保田暁一／３
哀悼　小川恵子／４　エノクのように
松本瑞江／５
会員作品　ブログ伝道　藤本優子／６
殉教の丘　西坂　前山英子／７
＊関東ブロックから
会員作品　私のなまえ　島本耀子／８
堀川きみ子／　渡辺伸子／９佐藤一枝
／１０・一泊研修会報告／１１
＊中部ブロックから
会員作品　私のふるさと／玉木功／１２
水谷節子／１３　加藤恵理子／１４
新入会員紹介／１５
＊シンガポールから　三杉富子／１６
＊札幌ブロックから
山下アキ／１７・日野栄子／１８
コラム　あかし文章講座　池田勇人／
１９・２００５年会計報告／１９
＊本部事務局から・２０
＊編集後記／２０

関西ブロックより

追悼　木村　隆一さん

久保田　暁一

いま私は、平成十八年六月三日発行の『関西ペンの声』（№.十号）を見つめ、小柄な温容を想い浮かべながら、急逝された木村隆一さんを偲ぶ追悼文を書こうとしている。この『関西ペンの声』は、日本クリスチャン・ペンクラブ（ＪＣＰ）関西ブロックの会誌であり、木村さんが会友の松本瑞江さんと共に編集した四頁だての誌であり、期日にきっちり仕上げてくれたのである。

木村さんは、同誌の三頁下段に「決断のとき」と題して一文を書いている。その文中で、七年前（一九九九年）に、「上行大動脈を人工血管に、大動脈弁を人工弁に置換する手術が終わろうとした矢先に起きた心筋梗塞を抱えて」おり、医師や奥さんから命を保全するため烈しい運動を避けるように注意され、好きなテニスも中止することを決断して「神に祈る家族の愛に応え」たいと書いている。しかし木村さんは、六月八日に仲間とテニス中に失神して入院し、クモ膜下血腫のために急逝されたのである。木村さんは、人生の歩みの中で、テニスの活動を通して市のスポーツ振興に大きく寄与し、テニス仲間と共に各種のスポーツ賞を受賞されてきた。それだけにテニスから離れがたく、恐らく最後のテニスのつもりでラケットを握られたのであろう。

木村さんが六十六歳の若さで逝かれたことは、ＪＣＰ関西ブロックにとっても誠に大きな傷手である。私のみならず他の会友たちも木村さんの死を悼み、近江八幡教会で挙行された九日と十日の前夜式と告別式に参列した。

教会堂の祭壇は盛り沢山な花々で埋められ、会場へは市のスポーツ関係者や、木村さんが長年勤めていた近江兄弟社の病院関係の方々などが詰めかけていた。

近江八幡教会の美藤牧師が生前の木村さんの足跡を語るのを聞きながら、私は木村さんがＪＣＰ活動のために、誠意と責任感をもって会誌の発行や夏期学校の準備・運営等に積極的に協力してくれたこと、またＪＣＰが目指す「証し文章」の優れた書き手となるために、せっせとエッセイを書き綴って修練していたことなどを想起し、目頭を熱くしていた。

木村さんは、『死からの生還』と題するエッセイ本を昨年の二月一日に刊行し、出版記念会も盛大に挙行された。その一助にと、編集や文章表現などについて私なりに助言し、また「序文」も書いて、ささやかではあるが協力した。この書に、二〇〇五年度「滋賀県文学祭文芸出版物表彰」が与えられたし、応募したエッセー作品も入選し、木村さんの喜びは大きかったし、私も嬉しかった。

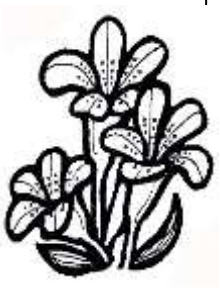
愛する奥さんと息子さんの、平安と神のお守りを心からお祈りする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

哀悼

小川　恵子

君召さる知らせを聞きて絶句する
六日前に会いしばかりに
三月前夫の葬儀に来し君の
告別式に参列するとは
うつし世の別れとなりぬ葬送の
鐘しめやかに鳴りつづけつつ
鳴り続く弔鐘かなし惜しまれて
君帰天する空うす曇り
哀悼の音色奏でる教会の
鐘に送られ君旅立ちし



エノクのように

松本　瑞江

木村隆一さんが急逝されたという知らせを聞いて、私は強い衝撃を受けた。つい、数日前にお会いしたばかりだったからである。

木村隆一さんは、日本基督教団の滋賀地区の教会の集会ではお交わりがなかった。しかし二年ぐらい前に、クリスチャン・ペンクラブ関西ブロックの集会を大津教会で開催した時に、ふらりと入って来られたのである。それが初対面だった。関西ブロックでは文書伝道として、あかしの文章を書くことを学んでいた。信仰生活で受けた神の恩寵を、いかにやさしい言葉で、分かりやすく未信者の方に証し、伝えることができるか。それが私たちの課題だった。

発言の順番が彼に廻ってきた時、木村さんは出身教会と持参された作品を発表された。「病院に入院していたので、その時に書きためたものが少しあります」と言われた。そして「ぼくはこういう会に来たかった。ここがぼくの出発点です」と少年のようにはにかんだ。二〇〇四年の夏期学校に出席されて「生と死のはざま」に応募され、新人賞を受賞された。木村さんの「生と死のはざま」は、ほんとうの生と死のはざまをすり抜けて生きた文章であり、私などは観念的な生と死のはざまにすぎないことをあらためて知らされた。本当のこと、事実ってすごいなあと思った。

それから「書きためてあるもの」を久保田暁一先生に見てもらい、本を出版したいと言われた。そして、たちまち『死からの生還』が出来上がり、私たちは出版記念祝賀会

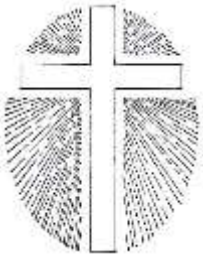
に近江八幡の会場へ招かれたのである。祝賀会は木村さんの友人たちが計画されたもので、朗らかな友だちが沢山おられた。また招かれたお客様の中には教会・近江兄弟社関係のほかに、県や市の教育委員会関係や、スポーツ関係、また、病院関係の著名な方々がおられた。木村さんって、どういう人なのだろうと思った。

木村さんに会誌『関西ペンの声』の編集委員になっていただき、作品を書きながら、ご無理のない程度に編集や、出版にも協力していただきたいとお願いした。

六月三日、『関西ペンの声』一〇号が刷り上って、木村さんは印刷屋さんから届いた紙包みをそのまま、例会に持参してくださったのである。クリスチャン・ペンクラブの研究例会は大津教会でもたれた。一〇号には木村さんの作品「決断のとき」が掲載されている。みな木村さんの健康を気遣った。

木村さんは翌日ご家族と一緒に、近江八幡教会の聖日礼拝出席され、水曜日には「金曜会」というテニスの集まりに、元気に参加されたという。

木村隆一さんはエノクのように、私たちの前から忽然と姿を消して、天に召されていってしまった。



会員作品

ブログ伝道

藤本優子

このお正月、インターネット上にブログを開設しました。自分自身のことや家族のこと、教育や社会問題など内容はいろいろです。かつて家族新聞を２００号ほど書いていたことがありますが、まさに「ネット版家族新聞」のような感じでもあります。

開設後すぐに、私はイエス・キリストの恵みを証しするために書きたいという思いを与えられ、ペンクラブのホームページと相互リンクの許可を頂いたことは大きな励ましになりました。また、ペンクラブのお二人のブログとも相互リンクを張らせて頂き、今ではペン活動の原動力になっています。

この六月に次女が、七月には長女が結婚し、二人とも巣立っていきましたが、子どもたちが私たちから離れてそれぞれの人生を歩み出す時に、神さまは最もふさわしいものを私に与えて下さいました。

これからは書いたものを神さまに用いていたきたいと祈りつつ、ブログを通して自己への旅を深め、これまでの人生をインテグレイトしていきたいと思っています。

ところが半年を経た今、新たな問題に突き当たっています。ブログに書き込まれるコメントの問題です。コメントは匿名で書きますから中には建設的でない無責任な内容もあるのです。それは十分に承知の上でした。ところが実際にブログのコメント欄に心ないものや、シビアな内容が書

き込まれた時、心が傷つくだけではなく、一瞬だったとは言え私の信仰は吹っ飛んでしまいました。

恐怖に怯えたのです。

何を恐れるのかと言えば、私や私の家族に危害を加えてこないかという恐れでした。

インターネット上に公開した文章ですから、誰が読んでいるか分かりません。勿論、全ての人に読んでいただきたいと思って書いているのですが、小心者の私には大きな厚い壁になってしまいました。

このことを知ったブログの友たちは時を置かずして返信してくださり、その温かく力強い励ましによって、支えられました。そして、聖書を読んでいくうちに新しい力が充満してくるのがわかりました。当座はコメントを受け付けないで続けていこうと思っております。

これまでの文書伝道者にも痛みと闘いがあったことでしょう。私も初めてその痛みと、祈り合い励まし合う力強さを身に沁みて体験させていただいています。

主の霊に満たされてブログ伝道を続けて行くことができますように、どうか信仰の弱い者のためにお祈りください。

「わたしはあなたに命じたではないか。
強く、また雄々しくあれ。
あなたがどこへ行くにも、あなたの神、
主が共におられるゆえ、恐れてはならない。
おののいてはならない」。
（ヨシュア一章９節）

殉教の丘　西坂

前山　英子

二〇〇六年一月二十四日から三十一日まで八日間、私は神戸バイブルハウスの主催する「聖書と教会の歴史を訪ねて」のツアーに参加した。そして、バチカン、ローマ、アッシジ、フィレンツェなどの各地を回った。

二十五日午前はバチカンで、一万二千人収容できるローマ教皇庁謁見会場を訪れ、ベネディクト十六世の講和を拝聴した。

その日の午後一行七十名は、ロトンダ広場にあるジェズ教会へ行った。ここはかって、カトリック、イエズス会本部のあった処である。荘厳できらびやかなザビエル礼拝堂を見学した。この日は私達日本人観光客のために、ふだんは見せない処を、特別に見せてくださるということであった。幾つもの部屋を抜け両側に宗教画の飾ってある通路を歩いて行った。やがてその先端の上部にある一枚の大きな絵に不思議なものを感じ、私は吸い寄せられるように近づいた。それにはまぎれもなく丁髷を結い、和服を着た日本人の姿が描かれていた。

絵の中央部に、白や黒の祭服を着た司祭らしい人物が、横一列に並んで讃美を捧げている。その前方には、女や子供、男等が正装して、刀をかざした役人に斬首されるのを、並んで敢然と待っている。周りは竹垣で囲み、たくさんの見物人が、竹垣の外から、丘の上から、舟上から見守っている。これはキリシタン殉教の有様を、繊細な筆使い、美しい色彩で描いた日本画であった。このような詳細な絵は、

現場を目撃した者でなければ描けないであろう。
ネロ皇帝の迫害ならまだしも、東洋の果て、しかもちっぽけな国日本で起こった殉教図を、なぜローマにまで来て見るのだろうか？　この一枚の絵から受けた衝撃は、私にとってとてつもなく大きかった。
帰国後、私は日本のキリシタン迫害の歴史を奇しくも学ぶことになった。

イエズス会の宣教師ザビエルが布教に来日したのは、一五四九年のことであった。初めは布教を許した秀吉であるが一五八七年「バテレン追放令」を出し、続いて家康も一六一四年「禁教令」を出した。一八七三年明治政府によって解除されるまで、禁教の時代は二百六十年間続いた。
首切り、火炙り、穴吊り、地獄責めなどの苛酷な拷問。さらに絵踏みや五人組制度によって発見され、殉教していったキリシタンは何と二十四万人と言われる。ネロ皇帝の迫害にも匹敵するものではなかろうか。
その後の調べでこの絵は「元和の大殉教図」と言われ、一六二二年十月九日ごろ、長崎にあった刑場西坂の丘で女、子供を含む七十人が殉教したときのものであることが分かった。
ザビエルを初め次々と日本に宣教師を送り出したイエズス会は、日本から届く迫害の情報にどんなに心を痛め、祈っていたことであろうか。この絵は迫害にめげず、信仰の戦いをりっぱに戦い抜き、天国に凱旋していった勇士たちの姿を留めているのである。

関東ブロックより

―初夏の学びと交わりの集い―

今年はＪＣＰ全体の夏期学校がないことから、関東ブロックでは初めての企画になりますが『グリーン・ジョイフル』と名を冠して、初夏の学びと交わりの集いをしました。
時は5月29日～30日の一泊二日。場所は長野県佐久郡にある松原湖バイブルキャンプ場でした。施設は八ヶ岳山麓の高原に、湖面のそばに立つ宿舎で、まさにグリーンジョイフルを満喫しました。
参加者は15名。さすがにご高齢の方々には無理でしたから、断念なさった兄姉には申し訳ないことでした。
関東だけに限らず他ブロックの会員も歓迎と、各事務局に広報しました。関西から、堺市にお住まいの中田てる子姉がはるばる新幹線を乗継いで参加してくださいました。

プログラムをご紹介します
29日　3時半　開会礼拝・池田勇人理事長
4～5時半　集会1　文章の推敲を中心に講義と実習
講義・三浦　実習・サンプルの文章を推敲する。
7時半～9時～10時　集会2
主題文《私の名前》、《名前折り句》を中心にグループ別で学び合う。(推敲を中心に。その後　主題文、折り句発表)
30日　9時　集会3　参加者の一言(プリントに従って)　閉会礼拝・池田師
昼食後　解散

参加者からアンケートを寄せていただきました。
＊推敲を中心の学びがとても良かった。学びになった。
＊「わたしの名前」の課題文は書きやすかった。「折句」は不慣れなため悪戦苦闘。すぐ思いついた。楽しかった等。
＊施設は周囲の環境が良く、清潔、食事もおいしく感謝。
また泊まりたい。
今回は言葉遊びをしました。自分の名前を頭文字として折り句を作り合いました。これにはたいへん苦労し汗をかきました。労作をご紹介します。

浅見鶴蔵（あさみ　つるぞう）

あ　愛　それは神の愛
さ　爽やかな愛　讃美の愛　それは神の愛
み　皆の愛　私の愛　それは神の愛
つ　仕える愛　募る愛　それは神の愛
る　るんるん気分の愛　るり色の愛　それは神の愛
ぞ　ぞくぞくする愛　存外な愛　それは神の愛
う　嬉しい愛　美しい愛　全ては神の愛

西山純子（にしやま　すみこ）

に　にっこり　笑顔を　忘れない
し　自然な　会話で　包みこみ
や　優しい　トーンの　音質で
ま　真（まこと）の　ことば　語りたい
す　素直な心　失わず
み　御子イエスの業　讃めたたえ
こ　この世に伝え　仕えたい

関東では【私のなまえ】のテーマで書いています。

私の名前はひかりへん

島本　耀子

私の名の『耀子』は、光り輝く人生を願って付けたという。私だけがなぜ、他のきょうだいとは少し違うのか、考えてみた。

上の姉の名は房江。両親の文夫、佐久の頭から一字ずつとっている。次の姉は澄子。兄は章。敗戦の翌年生まれの妹は邦子。弟は新憲法に因む文憲。すべて父の命名である。

母は生まれ育った土地でずっと暮らしてきたが、三年間だけ違う土地にいたときに私を生んでいる。その年、二二六事件が起きた。十一月生まれの私はまだ妊娠初期だ。四人目の子だけを生みたがらなかった母は、騒然としてきた時代の空気を恐れたのだろうか。

芥子を沢山食べてみたけれど、効かなくて耀子が生まれた。と、反抗期の十代の私に、母は言ったのだ。そんな私に、光り輝く人生などあるのかと、悩んだときがある。父は、そこまで見越していたのだろうか。

画の多い漢字に、小学校の習字では難儀したが、今は気に入っている。よい字だとほめられたことも度々ある。父にそんな話をすると、気難しい父の顔がいつになく綻んだ。

「耀」の文字には目聡くなっている。だが、「栄耀栄華」の四字熟語は嫌いだ。私の望みではないし、関係ない。しかし、光偏のある名をもらったのだから、せめて、瞳の輝きだけは失わずに生きたい。そう思うと次第に、自分の名

前が好きになっていったのだ。

パウロも私たちに言っている。暗闇から今は主に結ばれて、光となっている。「ひかりの子として歩みなさい」と。だが、聖書を知らない人に、「私は光の子」と言って、控えめにしたらと窘められたことがある。

「耀」は、かなり長い間制限漢字の中に入っていた。国語審議会の小父様方がどう考えようと、文字は文化なのだからこの世から消えてなくなりはしない。「光偏」は、漢和辞典に項目がない。少数派だからといって、私の大切な名前を粗末に扱わないで欲しい。時々間違った文字を書かれてしまうのは、このせいなのだろう。

ある医院で、私に名前の読み方を聞いた窓口の人が「珍しい字ですね」と言った。

「光り輝く子になれと、親は望んだのですよ」。

誰かがくすりと笑った。振り向くと、いい年をして……と言いた気な、皮肉な中年男性の横顔が座っていた。私は心から反省して以来二十数年、余計な口は慎んでいる。

最近の私には、『美雨』というもう一つの名がある。教会のホームページの小文のために考えた。何十年も昔の中学生時代、国語の先生から聞いた珍しい苗字が元になっている。「大豆田(まみゅうだ)さんは、『大豆生田』が長すぎるので『生』の一文字を削ったが、『大』を削るべきだった。日本語で『みゅう』の発音は非常に珍しい」と、先生はおっしゃった。

『美雨』を『みゅう』と読ませるには少し無理があるので、私はあれこれと迷った。

自分で自分の名を考えるのは楽しいものだ。

私の名前―きみ子は誰の子

堀川きみ子

私の名前は、きみ子。

両親が君子としなかったのは、あまり高尚な字にしてしまうと、名前負けしてしまうと思ったのか・・。子供の頃テストの時、平仮名で名前が早く書けるので良かったと思った。小学生のころ、「桃太郎」の歌でからかわれたことがある。「ももたろうさん、ももたろうさん、お腰につけた、きびだんご、ひとつ、わたしにくださいな」この「きびだんご・きみ子」が似ているからだったのか今でもよく分からない。

中学生の時、三年ほど長男夫婦が同居した時があった。偶然にも、兄嫁の名前が君子であった。家の中に二人のキ・ミ・コ。父が「キ・ミ・コ」と呼ぶと、二人が「ハイッ」と返事をするので、この時は混乱した。長男夫婦に女の子が産まれた。「美穂」と名づけられた。私は中学生で「叔母さん」になり姪の子守をした。トコトコ歩くようになった頃、兄家族は別の家に引っ越していった。

小・中学生の時はいつも、きみ子ちゃん。いまは、きみちゃんと呼ばれることも多い。ありふれた名前で好きでも嫌いでもなかった。女性は結婚で姓が変わる。どんな名前になるのかちょっぴり不安もあり、また期待感もあった。堀川はそんなに多くはない。全体として少しイメージが変わったかなと思った。結婚当初は新しい姓に馴染むのに時間がかかった。あれから四十年、もう堀川があたりまえでなんとも思わなくなっている。

父も母も、自分を大切に生きてほしいと思っていただろ

うに、私は何と自分を粗末に扱ってきたのだろうか。名前も大切なものなのに、私はあまり意識せずにいた。自分の存在を示すものなのに、今頃になってそれに気づくようになった。聖書の神さまは一人一人の名を呼んで語りかけてくださる。アブラハム、モーセ、ヤコブ、サムエル…。神さまはずっと私の名前も呼び続けていてくださったのだ。

「きみ子よ、きみ子よ…」と。

イエスさまは「救いの君」「平和の君」といわれる。きみ子は君の子、私は神さまの子どもとされたのだ。

（イザヤ・四十三・1）

わたしの名前

渡辺伸子

わたしは六月の夜に生れた。

父と母は「さくらんぼ」と名付けたかったという。けれど、「渡辺さくらんぼ」はすてきではないと考えて、「さくらんぼ」は愛称にして、「伸子」と名付けた。「のぶこ」と読む。だから「伸子」のルビは、「のぶこ」と「さくらんぼ」のふたつだと思っている。

宇宙へ伸びていく心。その心の持ち主になることを願って名付けたという。

わたしは幼稚園時代から今まで、一日のうちで夕暮れと夜が一番好きだ。特に、真夏の夕暮れと、真夏の夜が好きだ。

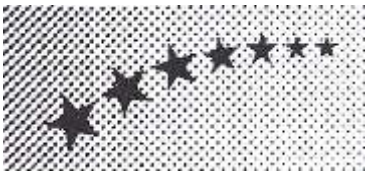
小学生時代に両親が、『こどもの天文学』という本をプレゼントしてくれた。その本を読んで、自分の心の仲に抱いた星々と月の宇宙は望遠鏡で見た夜空よりも美しいと思った。これからの一生をかけて心の中のその宇宙を、日毎に、年毎に、「無限」を、「永遠」を感じ、実感するところまで伸ばしたいと思った。

そのことを今日も思い続けている。

伸びゆく心の達するところに。

詩篇一四七篇四節

『主は星の数を数え、
のすべてに名をつける』
があるのだと思う。



折り句を紹介します。

駒田　隆（こまた　たかし）

こ　これがわたしです
ま　まことのおろかものです
た　たよりがいのない
た　ただのでんぷやじんです
か　かみさまだけしんじている
し　しまつにおえないおとこです

私の名前　イエスの一枝とされて

佐藤一枝

私の名前は一枝といいます。父が徳一、母が春枝で、父が一字ずつ取って一枝と名付けたと聞かされていました。

子供のころは平凡な名前だなあと思い、好きでも嫌いでもありませんでした。十八歳の時に洗礼を受けてクリスチャンになってから、聖書に出てくる人物の名前にはみな意味があることを知り、何か自分の名前に意味を持ちたいと思うようになりました。

ある聖日のメッセージでヨハネによる福音書十五章が開かれました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて焼いてしまうのである。」（ヨハネ十五・5、6）

そして、この箇所を私の名前の由来としようと勝手に決めてから、はや六十年の月日が経ちました。あれから数え切れないほど何回も何回もこの聖書箇所から語られるメッセージを聞きましたが、どれだけ理解できているかおぼつかない次第です。

イエスさまのお口から弟子たちにじかに語られた告別の説教の一部です。イエスさまの心の底からしぼり出すような熱い愛が、ぶどうの木とその関連を通して語られています。

そしてご自身が十字架につけられ、殺され、三日目によみがえられ、その後、父なる神のもとに行かれることをあからさまに弟子に告げておられるのに、弟子たちは、どこまで理解できていたでしょうか。イエスさまは言われました。「あなたがたは散らされてそれぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでに来ている……。」

私も救いの恵みにあずかり、クリスチャン生活を喜々としてはじめて、一枝という名を両親がつけてくれたことを感謝し、それも神様のご計画と信じてこの箇所を大事に心に刻みつけていたにもかかわらず、結婚して、姑の迫害を受け、長い年月教会から遠ざかってしまった苦い経験があります。

姑が他界し、未信者だった主人が劇的な回心をしてクリスチャンになってからは、私共の家から偶像はなくなり、次から次へと家族が救われてゆきました。姑を導けなかったことだけが本当に申し訳なく思っています。

私は今、ぶどうの木に接木された一本の枝であると信じられることが何よりの喜びです。イエスさまの樹液がどうぞ細い枝であっても、とどこおりなく循環されますようにと祈る日々です。一枝という名前を感謝して名前に恥じない生活をしたいと願わされています。

中部ブロックから

中部ブロックでは【ふるさと】のテーマで書きました。

ふるさとは「白ばらの祈り」「太陽は輝き続ける」

玉木　功

処刑室に入る直前、二十一歳の女性は「太陽は輝き続ける」と取り囲む人たちに向って毅然と言った。カーテンが開けられ、凶器が降りるまでの時間は僅か８秒間。時間を記録していた人物がいた。１９４３年２月２２日、午後５時。ギロチン台の露となった。

話題を呼んでいる映画「白バラの祈り」のワンカットである。この映画は既に過去二回映画化されていたが、猶も製作されたのは、１９９０年代に新しい資料〔ゲシュタポの尋問記録〕が旧東ドイツで発見されたからである。

主人公は現在もドイツで尊敬されている女性ゾフィー・ショルである。「ヴァルハラ」という偉人を讃えた殿堂がドイツにある。バッハ、ゲーテ、ベートーヴェンなどが選ばれている。ドイツ人女性としては彼女が。

１９４２年からミュンヘン大学の教授、学生を中心にナチスに対する抵抗運動が激しく動いた。グループ名は「白バラ」。スローガンを壁や塀に書き、また宣言文をチラシにして配布した。

私はアウシュビッツを訪れたことがある。またマスコミには登場しないがチェコの寒村でナチストが村民を虐殺した記念館にチェコの牧師に案内されたこともある。そのような時に、ドイツ国民はどのようにヒトラー一派を受け止めていたのか―という問いが胸中に浮上してきた。ドイツは教会が多い。また神学は世界的にも高い。抵抗運動では牧師の動きもある。しかし一般庶民はどうなのか―という問いはある。この映画「白バラの祈り」はアンサーである。

ドイツと関係深いピアニストのフジ子・ヘミングは「―死と対座しても目的と理想のために最後まで勇敢でした。そんなゾフィーを見てもう一つのドイツを思い、ほっとしてドイツを愛する気分になりました」と率直に言っている。

スターリングラードで大敗して３０万人の兵士を犬死にさせたヒトラーの独裁政権末期に、庶民は明日のドイツの闇をふるえて見ていた。そんな恐怖の時代に自国民に向って戦争の愚かさ、過ちを訴え、自由と良心と尊厳を守り抜くための運動を展開したグループが「白バラ」のメンバーである。ミュンヘン大学の授業中に構内でビラを配布した。休憩時間になり学生たちがそれを手にした。直後三人は逮捕された。

安部譲二（作家）氏は彼女の静かに力強く戦ったその姿について、このように評価している。

「この気高くも壮絶な勇気は、深い愛と豊かな教養、そこに厚い信仰があって初めて発揮されたのだ」

厚い信仰があったのだ。冷静に継続する祈りがあった。恐怖に落ち込む自分をゾフィーは祈りによって勇気づけた。

拘置所で両親と面接する。きつく抱き合う。母親はゾフィーに「主イエス様は愛しているよ」と言う。間もなく処

刑されるような状況の中で、この言葉が母親から語りかけられたことに感動する。

そうだ、いかなる時にもイエス・キリストは私たちを愛しておられるのだ。処刑一年後、彼等の作成したビラ「６号」は連合軍の空軍によってドイツの空に舞った。

逮捕から僅か５日の１９４３年２月２２日、午後５時に処刑。ゾフィー・ショルの「太陽は輝き続ける」と言う最後の言葉には自分の死が無駄でないことを信じ、明日への希望を託した祈りがある―。

神様が創造された「太陽は輝き続ける」ことを確信している。ゾフィーの真実のふるさとは天である。

私のふるさと

水谷　節子

ベランダに置く春の草花の苗と一緒に苺も一株買ってきて大きな植木鉢に植えた。最初の苺を母にあげるといったら、母はうれしそうに笑った。母は五月に八十九歳になる。

町は昨年の秋に合併されて稲沢市になった。

小学校の三年の夏休みにこの町へ引っ越してきた時、降り立った駅は無人駅で田んぼの中にあった。青い空に大きな入道雲が湧いていた。入道雲は歩いていく私たちに祖母の家までついてきた。

田んぼの中の道は稲田を抜けてくる風が気持ちよかった。

翌日、近所の子供たちとザリガニを取りに行って生まれて初めて田んぼに入った。バケツにいっぱいのザリガニを取った。祖母がそのザリガニを茹でてくれて皆で食べた。とても美味しかった。楽しかった田舎の最初の思い出だ。

現在はザリガニはいないし、泥鰌もいない。もし見つけても昔のようには食べられない。一時ほたるも見なかったけれど、最近は、「蛍を見る会」ができている。蚊帳の中にほたるを放して遊んだことが夢のようだ。

町の役場に就職したころには、私も地元の人間とみなされるようになって、祖父江弁が自由に操れるようになっていた。

町から出て行った同級生や顔見知りの若者たちが、盆正月に帰省すると懐かしそうに話しかけてくれたりした。私はその人達のふるさとの風景の一部なのではないかと思う。

十歳まで過ごした海辺が、胸の中でだんだん小さくなっていく。

私のふるさとは赤土の土地だったせいか、町全体がもう少し明るい感じだった。

三、四歳の頃だろうか、家の近くを省線電車が走っていて、朝早くに、電車に轢かれそうになった。何故そのような時間に線路にいたのか覚えていないけれど、セーラー服の女学生が飛び込んで助けてくれた。脇に抱えられて線路からとび出した瞬間に列車が通り抜けていった。忘れられない。

線路の向こう側にアメリカ人宣教師の教会があり、時々日曜学校に行っていて、かくれんぼで垣根の窪みに隠れたとき、神様が一緒にいてくれるから怖くないと思ったのが、神を意識した最初だった。

その頃はまだ町の海は遠浅だった。遥か沖によく帆船が並んでいた。

夏の砂浜は火傷しそうに熱く、子供たちは一列になって前の人の足跡の上を伝って歩く。

白い砂浜できれいな貝殻を探したり、貝殻のお茶碗でおままごとをしたりして、私たちは毎日日が暮れるまで海辺で遊んでいた。

現在は海が埋め立てられて、自動車教習所やとさつ場ができている。

先日、土の中から貝殻を見つけた小学生が、老人からこの辺が海だったあの頃の話を聞いている姿が、テレビで放映されていた。

海の波の音と潮風、そして稲田を渡ってくるひんやりした青田風に、私は神の「あなたとともにいる」という声を聞く。

キャベツ畑のはなこさん

加藤恵理子

わたしは、はなこさん。キャベツ畑で生まれたの。わたしがまだ卵の中にいた時、お母さんが、「花のようにきれいなこになってね」って、いつもわたしに話しかけてくれていたの。だから「はなこ」って名前なの。

はなこさんは、朝の散歩にでかけました。向こうからやって来たのは、かたつむりのチロリンです。

「おはよう、はなこさん。気持ちのいい朝だね。調子はどうだい？　僕は、今日、お母さんと一緒に向こうの畑まで行ってみるつもりなんだ」

「ありがとう。おなかの調子もいいし、お肌もつやつや。とってもいい調子よ」

「今日も素敵な一日でありますように」

そう言うと、チロリンとお母さんは並んで通り過ぎて行きました。はなこさんは、心がちくりんと痛みました。だって、チロリンは、お母さんと一緒だからです。

キャベツの葉っぱの陰で、蟻のクロッケが眠っています。

「あらあら。こんなところで寝ていたら、かぜをひいてしまうわよ」

クロッケは慌てて飛び起きました。

「はなこさん。起してくれてありがとう。僕、お使いの途中で眠っちゃったみたい。ママが待っているから、早く家に帰らなくっちゃ」

はなこさんは、また心がちくりん、ちくりんと痛みました。「ママ」って言葉を聞くと悲しい気持ちになるんです。

はなこさんは、お母さんの姿を見たことがありません。優しい声は覚えていましたが、はなこさんが生れた時にはお母さんの姿はどこにもなかったのです。

「チロリンもクロッケも甘えん坊だこと。わたしは一人ぼっちでも寂しくなんてないわ」

はなこさんは、そうひとり言を言いながらキャベツ畑のキャベツの家へ帰って行きました。はなこさんはキャベツ畑しか知りません。毎日キャベツ畑を散歩して、キャベツの家でキャベツを食べて過ごしていました。

ある日、はなこさんは眠くて眠くてたまらない気分になりました。どれ位眠っていたのでしょう。大きく伸びをすると、はなこさんの背中には、真っ白な二枚の羽が生えていました。

一匹のきれいなもんしろ蝶が近づいてきて言いました。

「やっと会えたわ。あなたに会えるのを、ずっと待っていたのよ」
　はなこさんは、その蝶がお母さんだってすぐにわかりました。やさしい声は昔と同じです。
「あなたに見せたい物がたくさんあるの。世界は広いのよ。さあ、出かけましょう」
　はなこさんは、大好きなお母さんと一緒にキャベツ畑の上を飛び回りながら、ひとり言を言いました。
「わたし、いろいろな所へ行ったとしても、このキャベツ畑が一番好きだと思うわ」

中部ブロック事務局より
新会員紹介

　中部ブロックに新しい会員が誕生した。
　一人は加藤恵理子さん。ご主人は読売新聞社勤務で一男一女の母。娘さんは名古屋大学を出て、電通に勤務している。
　児童文学を専攻し、童話を書くのはお手のものである。
　もう一人は、植田とも子さん。なかなか間口の広い文章を書く人である。今回は字数の関係で、坂口とともに文章掲出を見送ったのが残念。
　ミッションスクールである金城学院に中学から入学し、短大までいった人である。
　今は名古屋市千種区園山町に住み、築四十年の常盤荘というアパートを任され、各国の留学生の人達をお世話している。
　ご主人も養護施設を作ったり、大学のヘルパー講座の講師を務めたり、老人ホームのお世話をしたりしている。
　中学ではソフトボール、高校では水泳、大学ではバトミントンをやり、結婚してからは、登山、スキーをこなしたというスポーツウーマンである。
　娘さんも、お父さんの志をついで、ご主人と一緒に、過疎の村で息子さん四人と共にヘルパーや農協にかかわりあっている。
　小学校は、新空港セントレアに近い野間の小学校に入った後、名古屋市へ引っ越したのである。最近膝を悪くしたが、無事全快して加藤恵理子さんとともに、隔月の例会にはきちんと出席している。

　中部ブロックでは、文集「屋根」第２号の編集を準備しているが、そこには文章が何度も登場する予定である。
　どうぞ二人の会員と、旧会員ともども、よろしくかかわりあっていただきたい。
　あと一人、会員ではないが、竹内ゆき子さん。
　この人は、身体が弱いため例会に出席できない。そのため参加費だけで「文章添削」に参加している。
　昨年、近江八幡の夏期学校に参加する意思表示をしたのだが、身体の都合で参加できなかった。
　なかなかの達筆で、いろんな苦労話を書いて郵送してくる。ローカルならではの参加の仕方であるが、共に文章を励んでいこうと思っている。
（坂口良彬）

シンガポールから　三杉　富子

アジア圏を襲った大地震と大津波

２００４年１２月２６日に、インドネシアのアチェと言うところが震源地で大きな地震が起こり、大津波が近くの湾岸に襲いかかってたくさんの犠牲者を出した。

ちょうど、クリスマスの休暇をとって観光旅行を楽しむ人々が大勢いた。

私たちは、テレビで見たが、大津波の恐ろしさを目の辺りで見せつけられたような気がした。

大津波が来て、すべてをかっさらうように、すべてが海に戻され、流されて、多くの方々が亡くなった。奇跡的に何かに引っ掛かって助かった人もいる。行方不明者も多くあるようだ。家も店も車も何もかも海に流された。日本人の犠牲者もあったと聞く。楽しい家族旅行が一変して、犠牲になられた。

私たちの住まいはシンガポールにある。助けられた方が近くのアパートに住んでおられ、車いすでの生活をされていると聞く。悪夢のような旅路を歩かれた。早く健康を取り戻せるように祈りたいと思う。

震源地のインドネシアのアチェと言う所は、インドネシアの中では、一番キリスト教徒の多いところだと聞いている。

しかし、内紛争が絶え間なく起こっている。死と流血、争いと剣、災難と飢きんが起こり、さらにこの地震が起こった。全く、壊滅状態になった。

聖書には「これらはみな不法な者たちのために用意された。あの洪水が起こったのも彼らのせいである。」と記されている。

内紛争は一時的に中止のようだったが、まだ紛争は絶え間ないようだ。

また、聖書は「土から出たものはすべて土に帰り、水から出たものはすべて海に戻る」と語っている。

スリランカも津波にやられた。クリスチャンの友人がスリランカを訪ねた。犠牲にあった地域では、家など、何もかも流されているなかで、教会と寺院だけが流されていなかったと言っておられた。

それは、教会や寺院を建てた時の基礎がしっかりしていたからで、最初見たときは不思議な現象だと思ったといって話してくださった。

この大地震を教訓に、主の時がいつなのか、もう、近いのだろうか、と思う。　人間に共通する惨めさに困惑し、心に動揺を覚えた。

戦時中のことをふと思い出した。就学前のころだったと思う。朝方いつも同じ悪夢のような夢を見た。恐ろしくて目が覚めるという経験をした。海の中に足から引っ張り沈められそうな夢だった。しかし、主は私を守り沈めずに今も立たせてくださっている。（シンガポール在住）

＊三杉姉は関西所属・この原稿は前号のテーマ『海』の時にいただきました。遅れての掲載をお詫びします。

札幌ブロックから

再びＪＣＰへ

山下アキ

クリスチャンペンクラブを離れて七年が過ぎました。信仰生活のどん底の時に神様が満江先生と出会わせて下さりここに至っております。教会生活に疲れ果てボロボロになり教会を去りました。教会が悪いのでもなくただまことの平安が欲しかっただけです。教会に行っているのにおかしいと思われるかもしれませんが、その時の私には教会を去る以外に道はありませんでした。

ようやくまことの平安を与えられ、ペンクラブの事ももう終わったと思っていたのですが、どうやら終わらず、札幌支部長の日野様との交流は絶えることなく、やはりペンクラブは神様のものだったと気付かされています。

ある時は、理事長池田勇人先生より素敵な絵葉書をいただきました。ホセア書第六章３節『わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される』の言葉が書かれておりました。野の花の押し花が御言葉を囲んでいて、大切にして聖書を開く度に見ていただけなのに、七年過ぎてこの御言葉は、その通りにわたしのハートに響いてきました。そして、この私のために十字架で贖って下さったイエス様がほんとうに私に主となって下さったのです。

主は将来の光を下さるために（その時は真っ暗闇）、寒い寒い冬の雨を体験させて下さり、今は御言葉のとおり春の雨のように地を潤され、出会う一人ひとりがそこに存在しているだけでキリストの平和、神との和解が成っている様で「主を喜ぶことは我が力なり」ほんとうに主を喜ぶことができました。

今迄は聖書を律法的に（？）読んでいたように思いますが、今は、魂の奥深いところの霊で読む事ができるようになりました。使徒行伝にあるように、聖霊来たれり、聖霊は言葉で表現することはできませんが、どの個所を開いても、聖書は「わが足の灯、道の光」です。（詩篇一一九篇１０５節）

パウロのようにまでは行きませんが、御言葉を書いて友人に送ると、すべて主の栄光に変えてくださっている事が示され、文の上手、下手でなく主が喜んでくださっています。

満江先生は時々絵葉書をくださり、一行なのに大きなパワーを感じ、御言葉が心に残りました。例えば「新しいところに種をまけ」「どこまでも進んでゆかなくてはならない」その御言葉も又、その通りになりつつあります。また「彫刻できざむ如くに証しを書け」とよく言われました。

本気で祈って書くとき、すべては主が春の雨の様に地に平安を与えてくださいました。現実は厳しいのですが…。

私は今、ようやくペンの業に立たされています。和紙で一行の言葉、ペンで一行の御言葉を書いて地の果て果てまで届けよと祈らされております。

夫と私の出発

日野栄子

リラの花の咲くころ、関東支部の佐藤姉と共に私と娘は、緊張しながら千歳空港に、日本クリスチャン・ペンクラブの満江師（前理事長）と横山姉を出迎えた。一九八三年（昭和五十八年）であった。

翌日の講演会で、今まで聞いたことのない冴えわたった語りと、「文は信なり」の言葉にガアーンと頭を打たれ、私も心の板に文字を書いてみようと、その翌日入会を決心した。

ペンの風が海を渡って運ばれたあの日から、二十四年の歳月が過ぎた。

二十四年前と同じ季節のころ、後任の池田理事長と同行の三浦姉、西山姉を出迎えた。今までにない新風が会員を元気づけ、三十名を越える会衆を魅了した。個人的には、その後お会いした関東の槙姉との交流も感謝であった。

札幌は小さな群であったが、ペンの灯を消さぬように、精一杯支え合ってきた。しかし、かつては十名を越えた会員も転勤、高齢化他の諸事情で、今は二名になってしまった。私自身年を重ね、心身ともに弱さを覚えるが、神は囁く。「福音を告げ知らせるために」「十字架がむなしいものになってしまわぬように」と御言葉に導かれ、ペンの使命に再度燃やされた。長いスランプから脱した途端、原稿用紙の升目がぐっと迫ってきた。

陰に在って、私の話に忍耐を持って聞いて下さり、時には厳しく、愛の叱責をもって支えて下さったペンの友には、心から感謝している。

ここで、一人の人を紹介したい。我が愛する夫である。クリスチャン・ペンクラブと共に一緒に歩み、影武者の働きをしてくれた夫である。私を自由に「放し飼い」していると、講師陣に言い、笑いを誘ったが、スポンサーの役を厭な顔もせず引き受け、その場からスーッと身を隠す夫であった。私のわがままを黙って許し、何かと陰の労を取ってくれた夫である。人のために犠牲を払う事も喜び、全てにおいて自信に満ち、スマートに世の中を泳いでいる夫である。　私は心の中で「いい人にならなくてもいい。早く神を信じ受け入れてほしい」と朝に夕に、命をかけても祈り求めた。

その夫が救われた。二〇〇五年十二月クリスマスの日、洗礼の恵みに預かった。四十六年間の妻の祈りを、主は覚えておられた。神の時の美（うるわ）しさに感謝した。

神は夫の救いを神の方法をもって示された。夫はちょっとした用事中に転倒し、その週二度に及ぶ転倒で、胸部打撲の重症を負った。私の留守の事で、痛みにうずくまっていた。救急車で運ばれ、診断では胸部骨折、膵臓まで行っているかもしれないと言われたが、祈りの中に主ご自身が傷を負ってくださり、主の癒しによって守られた。

翌日の礼拝、午後の集会に出席し、求道生活に終止符を打った。自分の弱さを徹底的に知らされ、十字架を仰ぎ世の終わりまで、共にいてくださる復活の主を信じ、神と会衆の前に信仰を告白した。夫はその日から穏やかになった。

一人の救いまでの主の深いご忍耐と極みまでの愛、そこに私自身の新生と夫との出発点を置く。

コラム　出直し・あかし文章講座

池田勇人（理事長）

問　書こう・書きたい・書かねばという思いはあるのですが何か良いアドヴァイスをください。

答　それは私自身も教えてもらいたいことです。原稿の締め切りが近づいてくると、早く出さねば迷惑がかかってしまう、とあせる気持ちが湧いてきますよね。でもまた締め切りがないと、いつまでも書けないということもあるわけです。

悩み苦しむ中で得た、私なりの知恵というか作法みたいなものを、少しお話いたします。ペンを握れば、いつでも天から言葉が降り注いできて、あっという間に原稿用紙が埋まる・・・さすがクリスチャン・ペンクラブ会員だというような事はないということです。

まず書く前に、何を（素材）・どのように（技術）・何のために（目的）という重要な三点があることを覚えていて欲しいですね。

「何のために」ということは、もう会員の方々は耳にタコができるほど聞かされていることでしょうが、毎回確認しておきたいものです。私の体験や思いを記しつつも、自己顕示ではなく、キリストが透かし模様となって浮かんでくるように、祈りつつ言葉を紡いでゆく。

「どのように」ということも、夏期学校や各ブロックでのセミナーで学んでおられるわけですが、次回からの「出直し・あかし文章講座」で少しずつ触れてゆくことにします。最後に「何を」ということを考えてみたいのですが、テーマ・素材を決めるということですね。何を書くべきかテーマがハッキリすれば、半分はもうできたようなもの。カメラのように写したいものに焦点を合わせ、絞り込んでゆくわけですが、何を書いたらいいのか定まらないと、徒労の時間を過ごすことになってしまいます。

そこでまず祈り求めること。何を書くべきか、何を書きたいのか、何が書けるのか。祈りつつ求めつつ、家族や友人に話してみるのも効果があります。「こういう事を書こうかなと思っているんだけれども、どうかしら?」と語り合ううちに煮詰まってきて、いくつか素材の方が「私のこういう所を書いて」と頼んできてくれたら、最高です。もちろん擬人化した表現であることは、おわかりですね。それほどにこのことを書かねばという、神様からの迫りがあれば、必ず書きあげる力をくださるはずです。

いろいろな所に関心のアンテナを伸ばして受信感度を高めておくことも大切です。

２００５年ＪＣＰ会計報告

２００５年１月～１２月

収入		支出	
前年繰越金	311,820	印刷諸費・文は信なり他	49,890
年会費　57名	285,000	郵送発送費	15,060
入会金　4名	20,000	広告宣伝費	107,625
献金	11,000	理事会費	131,812
新書売上	42,719	事務消耗品費	582
		夏期学校補助（関西）	30,000
		事務局通信諸費	60,000
		ホームページ管理料	5,000
		次年度へ繰越金	270,570
合計	670,539	合計	670,539

2006年3月3日

日本クリスチャンペン・クラブ理事会

会計　三浦喜代子

会計監査　駒田　隆

〃　長谷川和子

事務局便り

三浦喜代子

◎２００６年２回目第１６号をお届けします。今回は各ブロックごとに紙面が作られＪＣＰの健在ぶりが具体的に見えました。各ブロックの活動状況とともに会員のあかし文章作品が掲載され、ペンクラブにふさわしい紙面作りになりました。日ごろ、お互いの作品に触れる機会が少ないので、今後はその方面でも大いに活用し、機関誌としての働きがさらに加味されていく事を期待します。

◎関西ブロックの木村隆一兄召天の報に大きな衝撃を受けています。ＪＣＰにとっても大きな打撃です。ご遺族の上にイエス・キリストの平安と慰めをお祈り申し上げます。

◎あかし新書の発行について

今年の理事会において、あかし新書２７をいよいよ出版することに決定し、現在ほぼ原稿の下準備ができました。新書は兼ねてからお知らせしているように『生かされている喜び』と『志に生きる』を合わせて一冊にします。まもなく案内書を発送する予定です。その節はよろしくお願いします。

◎祈りの課題

▽理事会の上に主の導きと祝福がありますように。また、理事一人一人が霊肉ともに支えられ、ふさわしい働きができますように。
池田勇人理事長・玉木功副理事長・久保田暁一・川上与志夫・長谷川乃武男・浅見鶴蔵・西山純子・三浦喜代子各理事

▽各ブロックが祝福されますように。ブロック事務局と担当者が支えられますように。
札幌・日野栄子、関東・三浦喜代子、中部・坂口良彬、関西・小川恵子

▽会員一人一人のあかしの文章活動（読み、学び、書き、広げ、本にする）が強められ、祝されますように。

▽ＪＣＰホームページが多くの方々に用いられますように。アドレスは表紙に。

▽あかし文章に関心を抱く方々が起こされ、新規会員が与えられますように。

◎新入会員紹介

加藤　恵理子氏（中部ブロック）
植田　とも子氏（中部ブロック）
久山　エミ子氏（関西ブロック）

◎召天者

木村隆一氏（関西ブロック）

◆編集後記◆

◆キャンプ場の辺りを散策していると鶯と郭公の声が聞こえてきました。あのような所でまた研修会を持つことができたらと、松原湖でのことを思い出しながらパソコンのキーを叩きました。　山本披露武

◆夏にしかできないこと、夏にしか書けないことがあります。今しかできないこと、今しか書けないことがあります。それが何であるか分かりたいです。　槙　尚子

◆名作の再読に挑戦しています。ネット上で『カラマーゾフの兄弟』をいっしょに読破しませんかと呼びかけたら、ペン友が数名名乗りを上げました。さすがです。さて、このツアーの結果やいかに。ご期待を。三浦喜代子

◆「其中一人として炎天」（山頭火）。
一九四五年八月十五日も暑い日でした。山頭火の句は一九三三年の句ですが、なぜかあの日をおもいださせます。　駒田隆

◆一人ひとりの祈りと想いが、各地の色や香りで包まれ紡がれたニュースレター１６号です。共に出会い語ることは稀ですが、遥かなペン友を感じ合える恵みに、このレターに感謝します。　西山純子